来て！見て！ 図書館（としょかん）

開館時間
午前9時～午後7時

休館日
12月 1日㈫・7日㈪・14日㈪・
21日㈪・28日㈪～
令和9年 1月 4日㈰

※休館日の図書の返却はブックポストをご利用ください(12月28日㈪午後3時～令和9年1月5日㈫正午の期間は閉鎖)。

●図書館●
佐間3―24―7(「みらい」内)
TEL:556―4227
FAX:555―3770

新年！本の福袋

▶日　　時　令和9年1月5日㈫～11日㈰
▶内　　容　中身が分からない本の福袋(3冊入り)を貸し出します。
▶そ の 他　無くなり次第終了。貸出期間は通常どおり

バリアフリー特別映画会

▶日　　時　令和9年1月11日㈰午後1時30分(午後1時10分開場)
▶場　　所　「みらい」映像ホール
▶作 品 名　「九十歳。何がめでたい」(上映時間99分)
▶定　　員　70人(先着順)

クリスマスおはなし会

▶日　　時　12月20日㈯午前10時30分～11時
▶場　　所　図書館ミーティングルーム
▶対　　象　未就学児とその保護者
▶定　　員　10組程度(先着順)
▶申し込み　12月2日㈫～16日㈫に直接、電話、行田市電子申請・届出サービスのいずれかの方法により図書館

電子申請・届出サービス

「第13回行田市立図書館を使った調べる学習コンクール」の受賞者が決定しました

全13作品の応募の中、審査会により次の5作品が賞に輝きました。なお、優良賞の2作品は、公益財団法人図書館振興財団主催の全国コンクールへ出展します。

◎優良賞
- 江原弘奈さん(西小学校1年)「「じょうもん→やよい→こふん」じだいで、ひとのくらしはどうかわったの？ほんでしらべて、じっさいにみにいって、たしかめた！！」
- 富永楓子さん(泉小学校5年)「体に起こる不思議な、なぞを解決しよう！」

◎奨励賞
- 須加賢斗さん(見沼小学校2年)「ブラックホールは何でもすいこむの？」
- 棚澤美依さん(忍小学校3年)「大すきな青のけんきゅう」
- 黒澤大樹さん(東小学校5年)「気をつけろ！身近な危険生物」

行田歴史系譜 393
資料がかたる行田の歴史 93

行田町の地子免許と伝馬役

江戸時代の農村は田や畑から採れる作物の生産量を基に年貢が徴収されていました。一方で城下町の町人たちは、年貢の代わりに町場の屋敷地に係る地代を支払うことになっていました。この地代のことを地子といいます。しかし、城下町は幕府や藩の公用通行や城郭の維持のための諸役を負担することを求められており、その代替措置として地子を免除される地子免許となっていた町がありました。行田町もこれに該当し、関東地方では他に江戸や岩槻、小田原、佐倉、水戸、古河、館林、高崎、宇都宮なども地子免許となっていました。

行田町が地子免許となった経緯については、享和元(1801)年に町年寄が藩に提出した報告書に記されています。それによれば、戦国時代の成田氏の時より少ない人数で城の役を務めていたため、地子免許となり、松平忠吉、松平信綱、阿部忠秋と城主が代わっても、これまでの経緯を調べるなどして地子を差し出していませんでした。古くから地子免許の地に居住していたこともあり、その後、家数も増えたことから城内往来の御用人馬や城の藻刈、普請の人足を差し出したいと願い出て認められたとあります。

このように行田町は地子に代わってさまざまな役を勤めてきたのですが、そのなかでも重要なのが公用交通に用いる人足や馬の費用を負担する人夫役・伝馬役です。行田町が常備する人足と馬の数は、時代によって違うのですが、寛保2(1742)年には50人50疋となりました。この負担は町の屋敷単位で掛けられ、一軒前・半間前という区分がありました。写真の「行田町記録」に掲載された町絵図には、各家の負担の区分が記されています。

このように公用交通の費用や城の人足の経費は町にとって年貢に代わる負担となっており、地子免許はどうしても維持しなければならない措置であったのです。

(郷土博物館　鈴木　紀三雄)


行田町記録(郷土博物館保管)

ぎょうだの会社をクローズアップ!!

有限会社サノシュー

時代の変化を読み、求められる一足を形に





会社プロフィール

代表取締役　佐野　博史

【事業内容】セーフティシューズ、長靴、軽作業靴などの企画・輸入・卸売、OEM生産

【所 在 地】馬見塚189

手頃な価格で、履きやすく、デザインも良い。その一足を生み出すため、靴の企画から海外での生産調整、輸入、保管、納品までを手掛けているのが、馬見塚に本社を構える有限会社サノシューです。

同社はスリッパの製造業として昭和37(1962)年に創業。旧南河原村は、後に日本一の生産量を誇るスリッパ産地となった地域です。しかし、安価な輸入品の普及などで、国内のものづくりを取り巻く環境は変化。佐野博史代表取締役によると、かつて780～980円ほどだった国産スリッパに対し、輸入品は398円前後だったといいます。価格競争が厳しさを増す中、昭和50(1975)年にスリッパの製造から卸売へと事業を転換。以降、先代が築いた取引先との縁を生かしながら販路を広げ、扱う商品もスリッパから長靴、セーフティシューズなどへと拡大しました。現在はワークマンやカインズなどの小売店にも商品を届けています。

近年は作業靴にもスニーカーのようなデザインが増え、安さだけでなく、撥水性や滑りにくさ、見た目の良さも求められます。しかし、機能を高めればコストも上がる。限られた価格で、必要な機能やデザインをどこまで実現できるか、そこに同社の真価があります。

「何十足と試作しても、採用されるのはわずか。自分たちが良いと思うものより、売り場で求められるものを見極める。それがうちの商品づくりです」。こうした考えから、同社は自社ブランドを持たず、取引先の要望を起点に商品を企画。過剰在庫のリスクや広告宣伝・販路開拓の負担を軽減する一方、バイヤーとの調整や試作品の改良を通じて商品化しています。

商品の製造は、中国江蘇省を中心とする5～6社の協力工場に委託し、靴づくりに必要な部材の調達先が工場の周辺に集まる生産環境を生かしています。佐野さんは約2カ月に一度、10日間ほどで現地の全ての工場を回ります。試作品の靴底の硬さや仕上がりを自ら確かめ、工場の担当者と改良点を話し合います。完成品を馬見塚の自社倉庫で保管し、外部倉庫の利用を減らし物流コストの低減にもつなげています。

円安や海外の人件費上昇など、厳しい経営環境が続きます。それでも、取引先の期待に応える姿勢は変わりません。スリッパ製造から卸売、海外生産へと事業の形を変えてきた同社。その靴は、今日も私たちの身近な売り場に並んでいます。

※このコーナーで紹介する会社を募集しています。
特色ある業務を行っている会社の情報を広報広聴課(内線318)までお寄せください。

俳壇 俳行（ぎょうだ はいだん）

俳句応募方法

一人3句以内。住所・氏名(ふりがな)・電話番号を明記の上、はがきまたは封書で広報広聴課まで。

※毎月末日必着

なお、一部添削して掲載する場合がありますが、不要であれば「添削不要」と記載してください。

今日を得て今日を失ふ花芙蓉　　緑町　松林　真弓

【句評】芙蓉は古くから愛でられてきた花で、美しいものの例えとされ、「芙蓉の顔」は美女を表し、「芙蓉峰」といえば富士山の雅称とされている。その芙蓉を詠んだ一句。朝方に咲き夕方にしぼむ花の生態を上五、中七の詩的詠嘆で見事に捉えた。作者の作品は毎回しなやかで詩情豊かな魅力的な季句が多く、筆者にとっても学ぶところが多い。

廃校の揺れるブランコ冬に入る　　下忍　荒井　王子

【句評】掲句はブランコ(春)と冬に入る(冬)の季重なりになっているが、時候の季語である冬に入るが一句の季題となるので気にはならない。現在、日本は少子化が進み、学校が次々と閉鎖されている。校庭に取り残されたブランコが寂しそうに揺れている様を見ながら、作者は学校を失ってしまった地域住民の胸中にまで思いを馳せているのだろう。

メロン買う決断までの手のふるえ　　棚田町　福田　嘉彦

【句評】本欄への投句は当季雑詠を宗としているが、作者は初見の方なので例外として採用させていただいた。昨今の物価高騰は庶民の生活を厳しいものにしているが、掲句にあるメロン(夏の季語)などはまさに高嶺の花で素通りする他はない。卒寿を超えた作者は清水の舞台を飛び降りる覚悟で購入を決断したのだろう。手の震えは高価ゆえか、はたまた高齢ゆえか。

蓑虫のその着こなしの上手きこと　　門井町　宮田　淑尚
歳かさね越える峠や秋の蝶　　忍　大澤　由子
秋高し怠惰ぬけ出しまず一歩　　渡柳　大西　道子
大きめのルーペ使えば燈火親し　　下中条　飯塚よね子
錦秋の秩父連峰目に刻む　　栄町　馬場　勇
足すくむほどの谷ありそぞろ寒　　忍　松岡　弘子
栗を剥きひとりの刻を充たしたり　　長野　鎌田　昇

(三沢一水　選評)